

自 著 紹 介 o w n w o r k i n t r o d u c t i o n

日本政治をめぐる争点：リーダーシップ・危機管理・地方議会



浅野一弘著
同文館出版
2012.5

筆者にとって9冊目の単著である『日本政治をめぐる争点——リーダーシップ・危機管理・地方議会——』は、これまでに著した拙稿を1冊にまとめたものである。

サブタイトルからもわかるように、本書では、日本政治の場において、従来から問題視されてきたリーダーシップ、危機管理、地方議会の考察に焦点を当てている。具体的には、第1章において、小泉純一郎首相の生いたちから説きおこし、同首相のリーダーシップの意味に関して、分析を行っている。そして、第2章から第5章では、東日本大震災、市町村合併、漂流・漂着物、政治家の失言という問題を危機管理の観点から検証している。さらに、第6章と第7章においては、第17回統一地方選挙と地方議会そのものが抱える歴史的・制度的な課題につ

いての考察を行っている。

読者のなかには、これら各章が一見、無関係なもののように思われる方もおられるかもしれない。だが、リーダーシップ、危機管理、地方議会という3つの視点は、極めて密接な関わりをもっており、混迷する日本政治の現状を分析する上で、必要不可欠な観点とってよかろう。

ところで、2012年12月16日の第46回衆議院選挙において、294議席を獲得した自民党が大勝した。今夏には、第23回参議院選挙が予定されている。それまでの間、本書を片手に、日本政治の実状について思いをめぐらせていただき、参議院選挙での投票の参考にして頂ければ幸甚である。

指定図書コーナー[312.1] A87]
浅野 一弘 (法学部教授)

比較文学考



張偉雄著
白帝社
2012.2

比較文学比較文化研究は、一国の文学文化現象を他の国や地域の文学文化現象に照らし合わせて考察するものである。この考察には文学や文化の異文化間移動をもたらす媒体としての異文化を生きる人々、そして翻訳作品が目目される。本書は「異文化理解」と「翻訳の変容」の二つの角度を設定したものである。

近代以来日本や中国において多くの異文化体験の先駆者がいた。かれらの中には異文化を自分自身の文化的養分として積極的に吸収し、自文化、異文化にも多大な貢献を成し遂げてきた人物が多く存在している。本書では黄遵憲や牧野義雄などに焦点を当てて異文化理解、共生の楽しみを示し、排他的攻撃的な異文化論の不毛さを照射する。

翻訳は「文学の国際化」に欠かせないものである。本書ではイギリスの翻訳家Arthur Waleyを中心に、翻訳における「変容」の実態及び原因を考察する。作品を翻訳するとき、訳者は意識的無意識的に自ら翻訳文に潜り込んで、自分の感動を翻訳文の読者に与えようとするものである。これは文学の翻訳は一種の再創作であると言われる所以である。Arthur Waleyの翻訳には再創作による変容が多く見える。翻訳の変容を指摘することによって、異文化に位置する原作者、翻訳者、或いはその両文化に位置する読者層に対する認識を深めて行く事ができ、異文化理解につながるものである。本書は以上のような角度で「異文化理解」と「翻訳の変容」の両端を探ってみるものである。

第2開架閲覧室 [901.9] C52]
張偉雄 (文化学部教授)

いち押しBOOKS



枯葉の中の青い炎

小説についてE・M・フォースターは、情報と詩の間にあると述べた。どこまでが現実でどこまでが虚構なのか、その境界が曖昧だからだ。特にその傾向は、戦後になってエッセイやルポルタージュなど、他の形式から書き方や文体を導入するようになってからより顕著になった。

本書に掲載されている短編には、そのような曖昧さをおもしろさとする作品が数編ある。そのうちの一編をご紹介します。タイトルは『ザーサイの甕』。

この作品はまず、清期末期の金魚ブームから話が始まる。当時は品種改良によって、いかにグロテスクな金魚を作るかが問われており、金魚作りの名人はザーサイを漬けた甕で金魚を育てると傑作が出来ると信じ、事実、作っていた。しかし、名人の死後、家族はこの最高の金魚を気味悪がって長江に捨ててしまう。

話は変わって、日本は東京にある弁当屋が戦後の経済成長期に躍進するさまを描く。この会社は中国からザーサイを甕ごと輸入して川沿いの倉庫に保存していた。しかし、そのまま時流に流され、会社は衰退し、現代ではザーサイだけが倉庫から溢れて野ざらしにされていた。

ここからがこの作品の見所であるが、読者の楽しみとしてとっておこう。この金魚と、現代の東京が虚構によってリンクするさまを、ぜひその目で確かめて欲しい。

表題作は、川端康成賞受賞作。



辻原登著
新潮社
2005.1
2階書庫[913.6] Ts41]
小柳 耕 (外国語学部4年)

日本近世の起源：戦国乱世から徳川の平和へ

良い歴史の本とはなんだろうか。私は、参考文献が多く、広く深く内容が充実しているものだと思う。そう考えたとき、例として挙げるのが本書である。

渡辺は近世史家であるが、本書ではその前時代である中世末期の日本、とくに戦国時代を俯瞰し、戦国大名のパワーゲームとしてだけではなく、真に迫った中世像を描くことに努めている。それだけに、参考された資料は当時の文献から戦前の研究、最近のものまで多岐にわたる。そのため、本書は並々ならぬ情報量と迫力とをもって、読者の目の前に中世の日本を現出させるのだ。特に、岡本良知の古典『十六世紀日欧交通史の研究』によりながら、宣教師を介した奴隷貿易の実態に迫る第二章は圧巻である。

渡辺は、生と死が間近であった時代を論述したしかるのち、この時代をどう捉えるべきかという問いに「近世のための布石であった」と述べる。逆を言えば、この中世末期という時代に大量の血が、死がなかったなら近世は形成されなかったであろうという。

その語りは哀切を含みながら、手向けのようすにすら聞こえる。

本書はこの熟練の歴史家の著作の中でも、白眉の出来。



渡辺京二著
洋泉社
2011.7
第2開架閲覧室[081.6] W46]1]
小柳 耕 (外国語学部4年)

イニシエーション・ラブ

この作品は人に内容を言っはいけない本とされています。舞台は80年代。まだ携帯電話もない時代で、ちょっとうぶな主人公の恋模様が描かれていく恋愛小説です。恋愛小説なんです。あらすじはこうです。

——恋についてなにも知らない主人公の『僕』は、ある日たまたま誘われた合コンである女性と知り合います。それがマユコという『愛嬌のある顔』をした女性でした。最初はあきらめていた『僕』は、意外なことにそのマユコと親睦を深め、やがて付き合い始めます。そして二人はより深い仲になっていき——

そんな過程を描いた。恋愛小説です。恋愛小説なんです。

この小説で描かれる恋愛はとでもリアリティのあるもので、恋愛の良さ、怖さのようなものを、読んでいるうちに感じる事ができると思います。

また、一昔前の恋愛ならではのエピソードやシチュエーションも多数出てきますので、団塊の世代の方々には懐かしく、若い人には「こんな時代があったんだ」と感じさせてくれる小説だと思います。年齢層を問わず、幅広い年代の方に読んでいただきたい本です。

そして読んでいただいた方は、どうか口を閉ざしていただきたい。そしてまだ読んでいない方にぜひ薦めていただきたい。とても面白い恋愛小説があるので、ぜひ読んでくださいと——。

さあ、あなたも読んでみませんか？そしてこの本の虜になってください。

乾くるみ著
文芸春秋
2007.4
文庫本コーナー[B913.6] I59]
小林央昌 (経済学部3年)



2099恐怖の年〈全6巻〉

西暦2099年、世界のあらゆるものがコンピュータネットワークで結ばれ、管理されていた。人類は永遠の平和を手に入れたかに見えたが、未知のコンピュータウィルスによって世界は一転、未曾有の危機に直面する。すべては天才少年ハッカー、デヴォンの仕業だった。

一方、ニューヨークに住む14才の少年トリストンは、恵まれた環境で、恋人もいて、なに不自由ない生活を送っていた。彼もまたコンピュータの天才であった。とある出来事をきっかけに自らの出生の秘密を知ることとなった彼は、世界を揺るがす大事件へと巻き込まれていく。

「天才vs天才」の手に汗握る攻防「幾重にも張り巡らされた陰謀」「地球のみならず、月や火星、宇宙ステーションにまで及ぶ壮大な世界観」「登場人物たちの苦悩や葛藤を描いた人間ドラマ」等々、様々な魅力的要素が絡み合い、物語は進行していく。

小学校高学年からを対象としており、内容が難しいということはない。しかしながら、ハリウッド映画のようなスピード感のある物語は、幅広い年代で楽しめることは間違いない。

主人公トリストンが、幾度も窮地に陥りながら活躍する姿は、応援したくなること必至だろう。

未来への不安と希望に満ちたSF超大作。



ジョン・ピール作
唐澤則幸訳
偕成社
2003.3
第2開架閲覧室[933] P34]
和島佑樹 (文化学部2年)